「世界に通用する学生の育成を目指す」

報道関係者を招き、懇談・交流会開く

「２０１１年度報道関係者との懇談会」（広報室主催）が6月29日、東京・神田駿河台の中央大学駿河台記念館で開かれた。

懇談会は中央大学のビジョン、取り組み、近況等を報道関係者に広報するとともに、直接、情報交換して親睦を深めようという趣旨で毎年開かれており、この日は招待状を送付した報道関係各社の中から約１００名が出席。大学側からは久野修慈理事長、永井和之総長・学長はじめ常任理事、副学長、各学部長ら約30名が出席、懇談会と交流会の二部構成で行なわれた。

中央大学の近況と取り組みについて説明する永井総長・学長

第一部の懇談会では、最初に久野理事長が挨拶に立ち、「世界も日本も大きく変革している中で、大学だけがそこに留まっていてはいけない」と述べ、「中央大学の流れが変わってきたな、と感じ取ってもらいたい」と強調。そして「中央大学も将来世界に役に立つ学生を育成することによって、教育の道へ責任を果たしていく」と抱負を語った。

続いて永井総長・学長が「中央大学の近況と取り組み」について、パワーポイントを用いて説明。最初に、3月11日に発生した東日本大震災に触れ、大学は学生にとってセーフポート（安全な港）でなければならないとの認識を示したうえで、中央大学は「耐震補強工事をした後たったので、建物の被害はなかった」と述べた。

また卒業式を中止し、その諸経費にプラスアルファして計１０００万円を被災者支援に回したことを報告した。

これに関連して、被災学生支援について、学費免除などの経済支援を来年度以降も継続して実施し、入学試験の受験料についても同様の措置をとることにしたと説明。加えて、今年9月から新たに無利子の貸与奨学金制度を実施し、月額10万円（年間１２０万円）を限度に最長２年間貸与することを明らかにした。

永井学長は、中央大学が大震災後、ボランティアに参加する学生のための講習会や災害に関するシンポジウムなどを開催したことを紹介し、「大学の有している叡智を社会に還元していくことが、大学の社会的責任の一つのあり方だ」と述べた。

懇談会には多くの報道関係者が出席した

一方、今年度の重点的な取り組みとして、永井学長は「国際化の推進」と「キャリアデベロプメント」の二つを挙げた。

「国際化の推進」では、日中韓の大学交流を通じた国際水環境プログラムや、世界１０１カ国、６３４大学・研究機関が参加する国

連アカデミックインパクトへの取り組みを紹介。世界の大学・研究機関が協力し、課題解決をしていくことの重要性を強調した。

また、留学生と日本人学生が共に生活するシェアハウス形式の国際寮をオープンさせたことを紹介し、「（寮の学生には）国際的コミュニケーション力を涵養してほしい」と述べた。

「キャリアデベロプメント」では、新たに取り組んでいる「知性」と「行動特性」を高めるための就業力育成教育プログラムについて説明した。

このプログラムは、卒業生に求められるコンピテンシーを6項目、28のキーワードで詳細定義し、各キーワードに5段階の到達度を設定した「行動特性評価指標」に基づいて、学生が自己評価できるシステム『C-compass』を導入し、学生の人間力を含めた人間育成の向上を目指すのが狙いだ。

永井学長は、キャリアデベロプメントについて「『実地応用の素を養う』という中央大学の建学の精神にかなう」と説明。最後に、「知識のみではなく、人間力も身につけた、世界に通用する学生を育成していきたい」と述べ、説明を締めくくった。

第一部は、このあと質疑応答を行って終了。第二部の交流会は会場を移して行われ、和やかな雰囲気のなかで、報道関係者と大学関係者が歓談、親睦を深めた。

（学生記者　藤森皓子＝文学部2年）

「新しい伝統をつくっていきたい」と井口主将
「箱根駅伝を強くする会」が選手激励会開く

中央大学箱根駅伝を強くする会主催恒例の「選手激励会・会員懇親会」が7月5日、東京・上野の上野精養軒で開かれた。

選手激励会は例年4月中旬に開かれているが、今年は東日本大震災が発生した関係で、数カ月遅れの開催になった。会場には、強くする会会員はじめ、大学関係者らが多数出席し、今年春に入部した13名の新人選手はじめ駅伝全選手に励ましの熱い声援を送った。

冒頭、強くする会の上岡君義会長が開会の挨拶。はじめに1年生に向けて「勉強と運動の両立を効率よく行ってもらいたい」と文武両道での活躍を期待する一方、「高学年生の走りに闘争心の欠如があるのでは…。高学年ははじめから先頭に立つつもりで走ってもらいたい」と述べて、チームを引っ張る高学年の選手の奮起を促した。

また上岡会長は、中央大学の駅伝の歴史と輝かしい戦績に触れ、強くする会として「さらに学生に対し物心両面の支えをしていきたい」と約束し、「オール中央の精神でひとつになって頑張っていきたい」と強調した。

挨拶する強くする会の上岡君義会長

総合力の強化を誓う浦田春生監督

次いで、大学から久野修慈理事長が挨拶に立ち、「駅伝は中央大学の歴史そのもの」と指摘したうえで、「伝統ある学問・スポーツを中心に、感動、愛情を育んでいきながら大学を維持していきたい」と述べた。

また、選手に向けて「OBの声援に応える走りをしてほしい。本当の闘争心をもってほしい」と激励。加えて「強いチームは良い選手が集った集団。重要なことは良い選手を集めることだ」と述べ、有望新人選手の勧誘・獲得に力を入れる考えを示した。

続いて、永井和之総長・学長が「地方の学員会、強くする会の激励に応える走りを学生に求める」と要望するとともに、「先頭を走る気持ちを持ち続けてもらいたい」と述べて、選手を叱咤した。

一人ひとり紹介される1年生部員

次に、陸上競技部部長の井上彰法学部教授が挨拶に立ち、「（陸上競技部では）短距離の選手が活躍している。その頑張りを長距離の選手も活かしてもらいたい」と語り、駅伝選手の一層の奮起に期待を込めた。

これらの激励の言葉を受けて、答礼の挨拶に立った陸上競技部駅伝の浦田春生監督は、「良い戦力はいるが、結果が出せていない」と振り返り、今後に向けては「若い層が力をつけている。年長者もそれに負けずに成績を伸ばしてほしい。経験豊かな年長者を伸ばし、若手が年長者と競い合えるような環境をつくりたい」と述べ、チーム全体の総合力の強化に努める考えを強調した。

続いて、選手を代表して挨拶に立った井口恵太主将は「先輩の伝統を守るのではなく、（自分たちの）成績を伸ばし、新しい伝統をつくっていきたい」と意気込みを語り、「結果を箱根駅伝で残したい」と述べて、決意を新たにした。

これに対し、会場のあちこちから「頑張れ」「応援しているぞ」と激励の大きな声が上がった。

この後、久米薫主務が4年生から順番に選手を紹介。1年生の新人選手13名も紹介され、会場からは選手一人ひとりに熱い拍手が送られた。

乾杯の発声で懇親会へと移り、あちらこちらで選手を囲んでにぎやかに会話が弾み、世代を超えた交流が広まった。最後に、応援団リーダー部、チアリーディング部、ブラスコアー部が披露する校歌を出席者全員で歌って、会を締めくくった。

（学生記者　加藤静香＝文学部2年）

理工学部に「知の創造施設」が完成
後楽園キャンパス新2号館の竣工式行う

理工学部のある後楽園キャンパスに新築中だった新2号館が完成し、8月1日、久野修慈理事長、永井和之総長・学長ら関係者約100人が出席して竣工式が行われた。

新2号館は、創立125周年を迎えた中央大学が、より高度化する先端技術教育を推進していく大学として、また様々な時代のニーズや社会の負託に応えることを目的に、都心の教育活動拠点である後楽園キャンパスに新たに建設した「知の創造施設」。それまであった2号館、7号館とテニスコートを解体して昨年5月に着工し、今年7月末に完成した。

本施設は、鉄骨造りの地下1階、地上9階、塔屋1階、延べ床面積約17000平方メートルで、理工学

玉ぐしをささげる久野修慈理事長

部生命科学科、精密機械工学科、都市環境学科のほか、中央大学高等学校専用の教室・体育館などを収容している。

館内は省エネルギーへの配慮と高い耐震性、それに可能な限り柱をなくすことで容易に間仕切りが変更できるフレキシビリティーの確保など様々な技術的工夫が施されている。

神職のもとで厳かに行われた竣工式では、久野理事長、永井総長・学長がそれぞれ玉串を奉げ、出席者全員でお神酒を拝戴して、完成を祝った。

このあと開かれた直会で久野理事長は、関係者を前に「中央大学理工学部が国際的な理工学部として躍進してくれると確信している」と挨拶。永井総長・学長は「理工学部が飛躍していく拠点となる」と述べて、新校舎の完成を祝った。

また石井洋一理工学部長が「理工学部の将来構想の最前線として(新2号館を)活用させていただくことを宣言します」と決意を表明し、出席者の大きな拍手を受けた。

(編集室)

メインエントランス

新２号館の外観

エントランスホール

共用廊下